Book Review 27-13 ノンフィクション　＃テロルの決算

『＃テロルの決算』（沢木耕太郎著）を読んでみた。著者は横浜国大卒業後、ルポライターとして出発。『若き実力者たち』、『敗れざる者たち』等を発表した後、1979 年、本書で大宅壮一ノンフィクション賞、『一瞬の夏』で新田次郎文学賞を受賞。常にノンフィクションの新たな可能性を追求し続け、1995 年、檀一雄未亡人の一人称話法に徹した『檀』を発表。

1970 年 10 月 12 日、日比谷公会堂で 61 歳の社会党委員長の浅沼稲次郎を 17 歳の右翼の少年山口二矢（おとや）が刺殺した事件のノンフィクションである。著者が 20 歳代最後に仕上げた作品である。刺殺された現場写真が日本人で初めてﾋﾟｭﾘｯﾂｱｰ賞を受賞しているのだそうだ。著者には夭折者を描くことに執着があるらしい。興味がある対象として WBA 世界フライ級王座を 5 度防衛したが現役世界王者のまま 23 歳で事故死したボクサー大場政夫を挙げている（その後ボクサーに対するノンフィクションや小説を書いている）。

当日午後 3 時 5 分頃、浅沼が「選挙の際は、国民に評判の悪い政策は、全部伏せておいて、選挙で多数を占むると……」と言いかけた時、二矢が壇上に駆け昇り、持っていた刃渡り 33cm の刃物で浅沼の左脇腹を深く、左胸を浅く突き刺した。浅沼はよろめきながら数歩歩いたのち倒れ、駆けつけた側近に抱きかかえられて近くの日比谷病院に直行したが、内出血多量によりほぼ即死状態で、午後 3 時 40 分に死亡していた。二矢は現行犯逮捕された。
事件の 3 週間後に、逮捕後の二矢は「七生報国　天皇陛下万才」の文字を監房の壁に残した後にシーツで首を吊って自殺した。

浅沼稲次郎暗殺事件のもたらしたもの。
事件前に日本社会党は党内分裂で議席減が予想されていたが、事件による同情の影響で民社党のみ議席を減らし敗北した。日本社会党による野党第一党の地位獲得による 55 年体制確立の原因となった。
一方、事件前には自民党の安泰ムードとなっていた。その最中に起こった凶行は、ムードが一変する可能性があった。この日の夕方、池田内閣の責任追及の抗議デモが行われて 2 万人が集まったことは当時でも異例であった。社会党も池田内閣の総辞職を要求してくるなど、池田内閣は発足以来最初の危機を迎えていた。「池田総理自ら追悼演説をやるのが最良の方策です」という進言を受け入れ、衆議院本会議で追悼演説を行い危機を乗り切った。衆議院は解散され、自民党は 300 議席と圧勝した。社会党は 18 議席増の 145 議席だったが、

民社党離反の痛手を埋めるには至らなかった。民社党は 23 議席減の 17 議席と惨敗した。そして社会党は、浅沼の追悼ムードが薄れると、構造改革をめぐる党内抗争に突入していった。

さて本書は、犯人の山口二矢と被害者の浅沼稲次郎に対して、同じような分量で交互に描いている。事件の当日、浅沼稲次郎の演説会場の情報が掲載されたのが読売新聞だけであり、その読売新聞を二矢が読んだのも最近、無理やり購読させせられたという偶然であったという。浅沼稲次郎が前夜に遅く帰宅したのは、運転手が道を間違えたためであり、後日埋葬される多磨霊園に迷い込んだためという情報を著者は拾い出している。また、いつもは分厚い手帳を上着の胸ポケットに忍ばせていたのに、その日に限って、別の上着を着て、難に遭っている。刺された場所は、いつもなら手帳を収めていた箇所であり、いつもの上着を着ていたなら、死に至らなかったかもしれないと推測された。このように時代背景だけでなく、両者の周辺についても細かく書き込まれており、徹底した取材が行われている。加害者である二矢と、被害者である浅沼の生い立ちや性格を丁寧にかつ淡々と描いており、その中で戦前から戦後に至る日本の右翼と左翼についても見えてくるものがある。

本書を興味深く読むことはできたが、暗殺事件を淡々と綴る著者の意図が今一つわからなかった（暗殺事件の裏側には、社会背景、人物の生い立ち、偶然等様々な要素が関わっているということか）。